

分科会「手話の歴史」

助言者：米内山 明宏 / 司会：野呂 一

今年から新しくスタートしたこの分科会は、参加者数が定員を超えてしまい他の分科会へ変更された方が何人かいたそうで、本当に申し訳ありませんでした。

1日目はまず、日本手話学会の事務局長である市田泰弘さんに「手話学の基礎知識」をお話ししていただき、助言者米内山明宏さんが市田さんにいろいろな質問をして解説していただく方法で進行しました。

言語とは、人間にとって、“歩く”、“食べる”ことと同じように自然に習得するものであること。まったく異なる言語をもつ大人が出会ったとき、その場でしか通用しない言葉（これを「ピジン」という）を使ってコミュニケーションを図ろうとするが、彼らの子どもたちがそのピジンを基に自ずと言語として体系化していく（これを「クレオール」という）過程があること。手話もれっきとした文法を持つ自然言語であることなどを、具体的な例を挙げながら話していただきました。

ろう歴史学に興味を持って参加した方々にしてみれば、言語学はまったく異なる分野でかなり難しい面があったと思いますが、手話学のイメージがつかめたことで手話に対する造詣が深まったことと思います。

2日目は、他己（食べ物のタコではない）紹介からスタートしました。席の後にいる人とペアになり、10分間でお互い自己紹介をし、相手のことで印象に残ったことを整理してもらいます。時間がきたところで2人1組で前に出てもらい、1人がもう1人を参加者の皆さんに紹介します。1分しかない紹介時間の中で、どれだけ相手の魅力を皆さんに紹介できるか、話される人はかなり焦ってきます。

こうした作業は、ろう歴史学研究に必要な行為がすべて含まれていることを体で知ってもらおうという趣旨で行われたものです。ろう歴史に関する文献はかなり限定されており、それも聴者が書いたものがほとんどです。そこで、ろう歴史研究を進めていくためには、どうしてもフィールドワーク（野外調査活動）が必要になってきます。つまりどうしてもインタビューの“技術”が求められてしまうことを伝えなかったのです。いかがでしたか？

他己紹介によって参加者の緊張がほぐれたところで、米内山さんから「手話の歴史」について今まで知り得たことをいろいろお話しされました。仕事柄、日本あちこちで地方の手話やろう者の歴史を知ることが多く、そのエピソードに興味をそそられる参加者も多かったのではないのでしょうか。

日本の場合、聾学校の設立（これがろう者が集団化される第一歩になる）や、ろう者教師の全国的な異動（体系化された手話の教育や普及に貢献した）によって、わが国独特の手話が形作られ、ろう者の言語として発達していったのだらうというお話しをされました。また、地方独特の手話が数多く残っており、その歴史的研究や保護が大切であること、何でもかんでも手話を一つに共通化してしまうことは許されるものではないと強調されたこ

とに共感を覚えた方も多かったようです。

午後からは、野呂が6月の日本手話学会で発表した「トラピスト修道院の手話」を紹介しました。修道院には「沈黙の規則」というのがあり、音声を用いてはいけない時間には手話が使われていたということ、その手話は、中世時代に修道院の仕組みを創始したベネディクトによって導入されたことをお話しました。

他に、地方特有の指文字があったことにも触れ、佐賀で生まれ、終戦時まで佐世保盲啞学校で用いられた「手真似いろは文字」があることを、古いビデオで紹介しました。これは、米内山さんがかつて長崎で山崎栄子さんに別件でインタビューしていたときに偶然見つけたものをビデオ収録した貴重な記録です。(この研究については、大阪の梶本勝史氏がいろいろな論文を発表されております。)

この分科会に参加された皆さんにとってはかなり収穫が多かったものであらうと思いますが、助言者や司会にとって研究発表が1件もなく、さびしい分科会でした。市田さんや米内山さん、私からのお話だけに終始してしまったことが心残りです。次回は、多くの研究発表が出され、前向きな議論ができることを期待したいと思います。

(文責：野呂 一)